

土木広報センター

土木広報センターは、土木広報戦略会議の基本方針に基づき、自らが主体となる活動の実施（「土木の日」の活動を含む）、各委員会や支部、関係団体が主体となつて行う活動との連携・調整、情報共有・発信などを行うことを目的とする。

平成30年度 土木の日および くらしと土木の週間 報告

本部

平成30年度の「土木の日」および「くらしと土木の週間」は、例年どおり全国規模で実施され、盛会のうちに終了しましたことをここに報告申し上げます。

1987年11月18日に「土木の日」を制定しましてから、2018年11月18日で31周年を迎えました。各支部や各関係団体の多大なご協力を賜り、「土木の日」が全国的に浸透してまいりました。土木広報センターといたしましても、今後、より一層、一般の方々に社会資本の重要性を認識していただけるように活動を進めていく所存です。今後とも本行事に関しまして、多くの方々のご理解やご協力を賜りますようお願いいたします。「土木の日」お

よび「くらしと土木の週間」の実施にあたりまして、ご尽力いただきました多くの皆さま方に心から御礼申し上げます。

土木の日記念行事

「土木の日」および「くらしと土木の週間」の本部行事として、「土木の日シンポジウム2018」と「土木コレクション2018」を実施しました。

土木の日シンポジウム 2018

2018年11月18日（日）、東京都新宿区にある土木学会講堂において、シンポジウムを約4時間にわたり実施した。50人を超える参加者があり、活気あるシンポジウムとなった。なお、各支部や来場できなかった人のために、シンポジウムの様子はYouTube（ユーチューブ）を用いてライブ配信した。

地域インフラと市民普請 —— 農山村・漁村における市民連携 ——

「市民主体、市民主導の地域インフラへの関わりが一切なくなると何が起きるのだろうか？」この逆説的な問いこそが、市民普請の役割を今一度位置づけるきっかけになるだろう。都市や農山村・漁村、平地、中山間地などの地域の基盤となる、川・道・まちづくり・森林など、管理するもの、それぞれに応じた市民普請の役割や課題があるのではないか。本シンポジウムでは、農山村・漁村に焦点を当てて現状を共有し、農山村・漁村の地域インフラのあり方と市民普請の役割や課題について議論した。基調講演として、東京大学・知花武佳准教授（専門…河川工学）より、総合的な観点から話題を提供した。



11月18日の「土木の日」に開催されたシンポジウム

いた。その後、「川」「農地」「道」の視点から3名の演者に話題提供をいただき、総合ディスカッションにより議論を深めた。

基調講演においては、知花准教授より「中山間地が担ってきた国土保全・人材育成機能のこれから」と題した講演をいただいた。全国の1級水系の上下流をすべて巡った経験をもとに、中山間地域の自然環境の現状、そして地形・地質と集落との関係、林業、道、農業、人材育成の観点から中山間地の特徴を説明いただき、中山間地



知花武佳准教授 (東京大学)



西村祐人主任研究員 ((株)文化財保存計画協会)



真田純子准教授 (東京工業大学)



岩城一郎教授 (日本大学工学部)

が担ってきた国土保全などの役割に今後どのような課題があるかについて述べられた。

かつての自然破壊に対する反省から、良好な自然環境保全のためには、人の手を排除した、ありのままの自然状態(手つけずの自然)を保持すべきとの風潮もみられた。しかし、それはその時点における、あ

りのままであって、過疎化や外来種の侵入などの場の条件が変化した結果、現状では数化が進むなど決して好ましいとはいえない状態にもなっている。そうした状況に鑑みると、特に中山間地の好ましい環境とは、手つけずの自然ではなく、手つかずの自然領域と人工的な都市領域との中間にあるバッファ空間であって、経験的か

つ感覚的に、不確実性の多い状況での意思決定を繰り返しながら、管理・調整される環境ではないかと思われる。ただし、中山間地と一口にいても、地形・地質やそれに応じた水利用形態などによって、地域の様相は異なる。たとえば、四万十帯では谷は深く切れ込み平地は少なく水は得にくいのに対し、花崗岩が

広く分布する地域では、開けた沖積地で豊富な水が得られることも多い。このような地形・地質条件を基盤として、アクセス・コミュニティ・産業のそれぞれの機能空間が、地域の特性に応じて折り重なることで、中山間地域は形成されているとらえるべきである。

中山間地の主産業である林業や農業については、過疎化による衰退を支ええることを念頭に、中山間地の林業・農業がもつ洪水抑制、美しい農山村景観の保全などの多面的機能に^①応じた直接支払制度などの補助金が運用されてきた。しかしながら、この多面的機能の価値に関して必ずしも十分な理解があるわけではなく、その価値の受益者がその場の居住者とは異なり、曖昧なこともあるために、想定されたような機能が発揮されないことがあるなど、多くの課題が浮き彫りとなっている。近年では、木質バイオマス発電など、中山間地の経済的状况を変えうるものも現れてきているが、地域の暮らしや地域インフラの健全化に好ましい影響があるのかどうかは十分予見されているとはいえない。

なお、多面的機能の文脈では、中山間地の人材育成機能にも注目すべきである。ある小学校では、眼の前に小川が流れ、水がどこからきて、どのように利用されている

のか、という水の動き、すなわち流域の概念をとらえられる有利な立地条件にある。しかしながら、川遊びや田んぼなど、里山の暮らしから得られる感覚を教えることのできる人材は少なくなっている。これには高齢化だけではなく、世代間の自然観のギャップも関係している。

さまざまな問題を抱えてはいるが、中山間地は依然として多くの魅力を持している。群馬県川場村は、過疎地域にまで指定された村であったが、現在、村内の道の駅は大変な賑わい^②をみせる。そのきっかけは、世田谷区のふるさと村構想によって連携を強化したことにあるという。知花氏は最後にまとめとして、「自然に対応した暮らしや、そこで学べる感覚は今ひとつの



萱場祐一水環境研究グループ長 (土木研究所)

岐路にある。川場村のような上下流の緊密な連携は、中山間地を救うきわめて重要なキーワードであり、防災対策などとも連携しながら深化させていくことができるのではないかと述べた。

(株)文化財保存計画協会の西村祐人主任研究員からは、「川」における市民普請の例として、鹿児島県串良川の川原園井堰かわらのいづみについて紹介された。川原園井堰は、取水期にのみ山から刈り取った柴を立てかけて仮設の堰とする「柴井堰」である。かつては全国の川に見られたが、今はほとんど残っていない。西村氏は文化財保護を担う立場から、文化的景観を文化財として保全する枠組みについて触れながら、地域インフラとは何かについて、歴史的構造物などのエリートインフラと対比しつつ、地域社会や周囲の自然環境と密接に関わり、かつ持続的に維持していけるようなインフラである、と述べた。また、こうした地域インフラを身の丈に応じ活用するためには、一つのインフラの中に自然素材でできた柔らかい部分と、コンクリートなどの近代的材料による硬い部分とがうまく組み合わされていることの重要性について述べた。

東京工業大学・真田純子准教授(専門…景観工学など)からは、「農地」の地域イ

ンフラとして「石積み」について述べられた。石積みは良好な農村景観を生み出す基盤となっているが、地域の高齢化や人手不足、技術の継承が進まないことにより維持管理できない地域が増えている。また、補修に行政の手続きを通すと、石積みの補修は法面の補修としてコンクリート壁に置き換わってしまう場合も多い。真田氏はこうした現状に対し、地域の石積みを補修しつつ、技術を学ぶ「石積み学校」の取り組みを2009年より継続している。さらに、その経験から得た技術をわかりやすい冊子として全国に展開している。真田氏は、「石積みは難しい技術というイメージが浸透しすぎていることが問題で、より多くの人に石積みは学べば誰にでもできることを実感してほしい。そのことで、石積みの多様な魅力が社会に広まれば」と述べた。

日本大学工学部の岩城一郎教授(専門…コンクリート工学)からは、「道」の地域インフラの視点から「みんなで守る。橋のメンテナンスネット」と題して、地域の橋梁維持管理に関するアイデアが述べられた。岩城氏は、インフラの維持管理については、インフラの医療行為ともいえるべき専門家が確実に実行すべき部分も重要視しつつ、「予防医療」に相当する日々のメン

テナンスやチェックの重要性を述べた。岩城氏と指導した学生が共同でつくり上げたセルフメンテナンスモデルは、橋梁の劣化を促進する水の作用に着目し、福島県の橋梁定期点検要領に準拠しつつも、市民にも親しみやすいデザインでつくられている。大学に近い福島県平田村で展開し、安全性を点数化したものをマップにした。平田村ではこれを見て住民が主体的に橋の定期メンテナンスに参画するようになった。岩城氏は、「このようなツールを活用しながら、自治体、大学・専門家、地元建設業、そして市民を信頼関係で結ぶことで、町村の橋を皆で守るネットワークづくりにつながれば」と述べた。

パネルディスカッションでは、土木研究所の萱場祐一水環境研究グループ長をコーディネーターとして、農山村・漁村の市民普請の意義、課題、学会としてできることについて議論が展開された。市民普請、地域インフラが機能するためには、地域がその価値を深く理解することが重要であるが、地域によって温度差もある。また、地域がもつ自然環境や里山の多面的な価値や自然の感覚への理解には、60歳前後に大きな世代間ギャップがあることも指摘されている。学生の教育活動などを活用し、外からの目でみることで価値の発見が

促せるのではないかと。地域インフラを科学の視点で検証することで、今の技術体系に沿ったものであることを示すことが重要ではないか。学会としては、工学的な技術のみならず、地域のコミュニケーションなど社会的な視点を含めて地域を取り巻く課題を議論する母体となるべきだし、そのような総合議論の場をつくってきたい。といった意見が挙がった。

土木コレクション2018
TOKYO DOBOKU FROM
1964-TO 過去から未来。
新しいトウキョウへ。

今年度の土木コレクションはJR新宿駅西口の新宿駅西口広場イベントコーナーで、11月20日(火)から23日(金)まで開催し、約3万5000人にご鑑賞いただいた。

今年度から「土木コレクション2018 TOKYO DOBOKU FROM 1964-TO 過去から未来。新しいトウキョウへ。」を新たなテーマに、1964年に開催された東京オリンピックに関連する展示を新設し、戦後、オリンピック開催に合わせて実施された土木プロジェクトの美しく繊細な手書き図面、芸術的な写真や映像を公開した。今回の展示



11月20日オープニングセレモニーのテープカット



人気のあった1964年の東京オリンピック映像ブース



会場には外国人観光客も訪れた



連日開催された「どぼくカフェ」

では、会場内の2ヶ所に映像ブースを設置し、当時の工事中の土木エンジニアの様子を紹介した。また、昨年度に引き続き、会場全体の統一感を意識し、各展示物前の解説用パネル、受付スタッフ着用のヘルメットやユニフォーム、アンケート回答者へのプレゼント用クリアファイルやステッカー、バッジに至るまで、「土木」をモチーフにした印象的なデザインとした。解説パネルは英語表記も併設し、海外の方に対するPRにも力を入れた。

簡易バナーによる展示では、これまで全国で展示してきたコレクションのうち、関東エリア（箱根地区国道1号施設群や萬代橋、勝沼砂防堰堤など）を中心に総数18点（22枚）の展示を行うとともに、土木学会が2014年に創設した市民普請大賞において、グランプリ、準グランプリ、優秀賞を受賞された5団体の活動を紹介するコーナーを設置した。また、本年度は展示期間内にどぼくカフェを併設し、日本橋、新幹線、国立競技場、橋梁の楽しみ方などに関する1時間程度のトークセッションを連日実施し、好評を博した。さらに、本年度も東京都建設局との共催で、「東京橋と土木展」と同時開催とし、建設局が所有する貴重な図面や写真、隅田川に架かる国の重要文化財指定の勝関橋（からしきばし）の模型を展示

した。

新宿駅西口広場における土木コレクションは、これまでどおり小学生の親子連れからお年寄りまで幅広い年代の方々に足を運んでいただいた。同会場での展示は今年で10年目の節目となる。例年、本展示会を楽しみにしているファンも多く、本年度は新たなコンテンツの追加やレイアウトの見直しを行ったところ、来場者の滞在時間の増加やSNSによる拡散につながり、さらに、多くの方にご来場いただけた。好循環も生まれた。また、アンケート回答者にプレゼント配布した特製クリアファイル、ステッカー、バッジにも関心が集まった。

来年度も引き続き東京オリンピックをテーマに、関連資料の展示をさらに充実させるとともに、本年度、好評であった映像コーナーやどぼくカフェ、参加型の展示の増設、年々増加する外国人来場者に向けた英語版の広報など、展示にも本年度以上に工夫を凝らした企画を予定しており、2020年に向けて機運を盛り上げていければと思う。今後も土木コレクションで収集したコンテンツのもつ魅力を活かしつつ、市民のみなさんの土木に対する理解を深めていけるような企画を展開していきたい。